中学生における感動体験が自己肯定感に及ぼす影響について

1007032
桑野　佳那子

【目的】

中学生は青年期前期と呼ばれ、平石（1990）によれば自己確立、自己形成の時代であると言われてきた。Erikson(1977)によれば、思春期・青年期の発達課題は「自分が社会的存在として『何者であるか』ということが重要な心のテーマとなる」と述べている。将来の自分、友人関係といったさまざまな悩みを抱える中で、自分は自分らしくあって良いと思える自己肯定感が重要であるといえる。自己肯定感を高めることとさまざまな体験をすることには関係があるといわれている。

本研究では上述の先行研究を踏まえ、感動体験と自己肯定感の関係について研究を行うことにした。研究対象は小学生から高校生を対象とした自己肯定感の研究は少ない（本田ら（2012））ことから、中学生を対象に行うことにした。「仮説 1.感動体験を経験しているほうが自己肯定感が高いだろう。」「仮説 2.感動体験のどのようなものがより自己肯定感に影響しているのか。」以上の仮説を元に、本研究では中学生における感動体験が自己肯定感にあたえる影響について検討することとした。

【方法】

被験者は、十勝管内の公立中学校Aに在籍する 1～3 年生の生徒を対象に調査を実施した。有効回答者は 179 名（男性 95 名、女性 84 名）で、有効回答率は 91.8％であった。

感動体験尺度は横山（2011）が 40 項目を因子分析して 6 因子 25 項目にしたものに従ってそのまま使用した。

自己肯定感尺度は、豊田・松本（2004）が自尊心と関連する諸要因に関する研究のために作成した自己肯定感尺度 10 項目を使用した。そのうち、4 項目は逆転項目である。

両尺度とも 4 件法で回答させた。

【結果と考察】

まず、感動体験 25 項目、自己肯定感 10 項目の記述統計を行った。感動体験ではほとんどの項目で 4 回以上経験をしている人が多かった。自己肯定感では、豊田・松本（2004）の先行研究に従って「人並みに価値のある人間だと思う」など 4 つの項目を自分を肯定的に受け止め励ますことから自己有能肯定感とした。一方「役立たずな人間だとときどき感じる」など 4 つの項目を自分の無能さを否定（=逆転項目）していることから自己無能否定感とした。全体的に自己肯定感が低いという結果になった。

次に、仮説 1 を検討するために、感動体験の 25 項目と自己肯定感の重回帰分析を行った。その結果、自己有能肯定感因子、自己無能否定感因子の両因子とも感動体験 25 項目全てにおいて有意な差（$p<.001$）があることがわかった。

仮説 2 を検討するため、重回帰分析を行い感動体験の各因子について有意な相関がみられるかを調べた。

因子ごとの相関平均値

	自己有能	自己無能
友人	0.27	0.27
スポーツ	0.20	0.27
自然	0.22	0.37
成功	0.26	0.34
家族	0.29	0.25
芸術	0.25	0.33

自己肯定感を育むには、さまざまな要因があるとされている。本研究では体験の中でも感動体験に絞り検討した。その結果、感動体験を経験することは自己肯定感を高めるとわかった。また、感動体験の中でも自然に関すること、芸術に関すること、成功体験に関することが特に自己肯定感と関係していることがわかった。

（指導教員　豊村　和真　教授）